

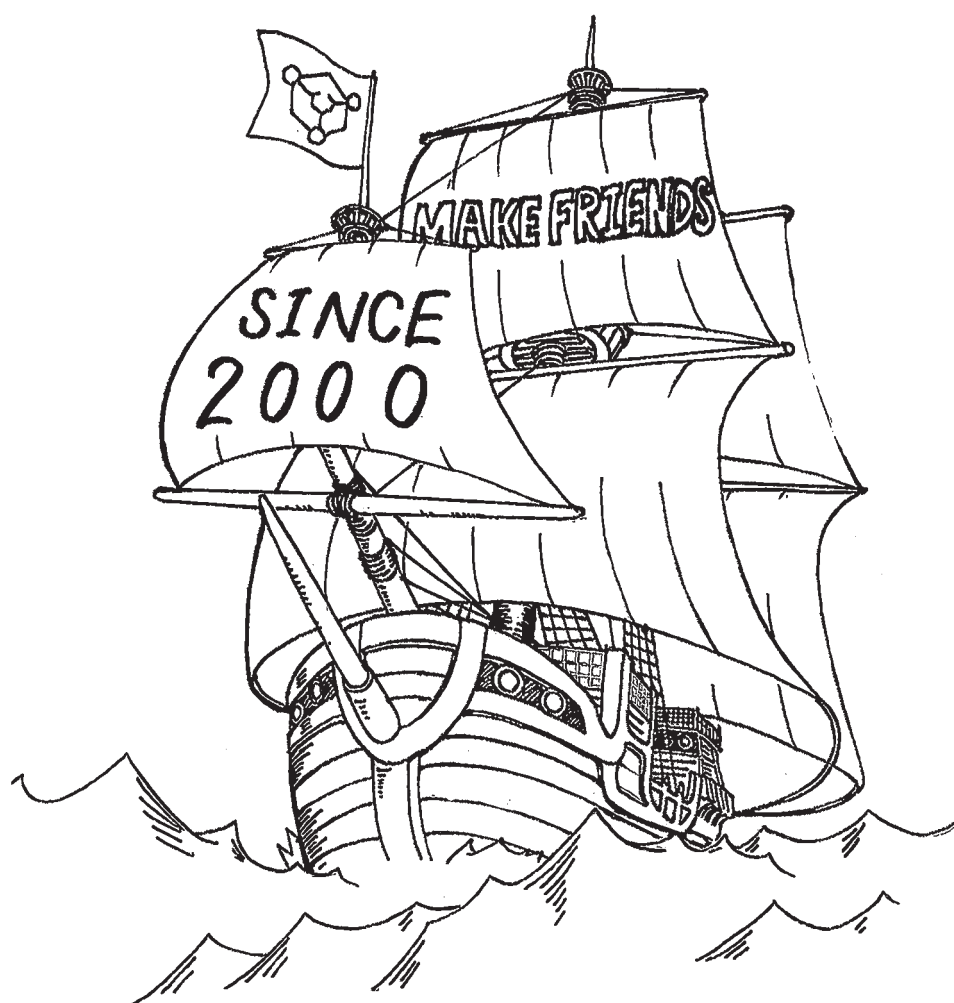
第14回教育実践総合センター教育研究シンポジウム報告書

2010（平成22）年度

熊本大学教育学部フレンドシップ事業実施・成果報告書

「子どもたちとの関わりを通して育つ学生たち」

～フレンドシップ事業の現状と展望～



熊本大学教育学部

附属教育実践総合センター

2011（平成23）年3月

目 次

はじめに

- 1 第14回教育実践総合センター教育研究シンポジウム ご挨拶
..... 熊本大学教育学部長 登 田 龍 彦 1
- 2 フレンドシップの“感動”(10年度)
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長 吉 田 道 雄 2

I メイクフレンズ活動の実施報告

- 1 2010(平成22)年度メイクフレンズ活動体系について
..... 熊本大学教育学部2年 平 位 和 久 5
- 資料 2010年度熊本大学メイクフレンズ学生名簿 6
- 2 2010年度メイクフレンズ年間活動一覧 8
- 3 2010年度メイクフレンズ外部依頼による活動一覧 10
- 4 2010年度活動報告
(1) メイクフレンズ「五福ホール班」
(2) メイクフレンズ「五福プランナー班」
(3) メイクフレンズ「中央班」
(4) メイクフレンズ「大江おかいもの班」
(5) メイクフレンズ「託麻プランナー班」
- 5 第14回教育実践総合センター教育研究シンポジウム・分科会開催要項 19

II 分科会の実施報告

- 1 メイクフレンズ学生自主企画分科会 23
- 2 実施計画 24
- 3 学生自主企画分科会の事後アンケート結果 33

III フレンドシップ事業のまとめと課題

- 1 10周年を迎えるメイクフレンズ ー時を越えた「つながり」に感謝ー
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 中 山 玄 三 43
- 2 平成22年度フレンドシップ事業の感想 ーフレンドシップ活動の歴史と学生の成長ー
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 高 原 朗 子 44
- 3 フレンドシップ事業に思う
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター特任教授 田 中 耕 治 45

第14回教育実践総合センター教育研究シンポジウム ご 挨 拶

熊本大学教育学部長 登 田 龍 彦



ご紹介いただきました教育学部長の登田でございます。第14回教育実践総合センター教育研究シンポジウムの開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

今回は、「子どもたちとの関わりを通して育つ学生たち」という名の下に、フレンドシップ事業の現状と課題について研究報告がなされると伺っております。本事業は、平成9年度から2年生から4年生を対象にした選択授業科目「教育実践研究指導法演習」として始まったものです。教師を目指す学生が、子どもたちとのふれあいを通して、子どもたちの気持ちや行動を理解し、豊かなコミュニケーション力と実践的指導力を身につけることを目的とする教育的活動です。本事業を支えるものとして、1年生を含めた約70名のサークル「Make Friends」が存在し、5班に分かれて熊本市内の五福、中央、大江、託麻の4公民館等の社会教育施設や熊本県生涯学習推進センター、熊本市教育委員会生涯学習課と連携・協力しながら、子どもが参加する行事等の企画・運営が積極的に行われております。

本日は、各公民館の江川先生、諏訪園先生、魚住先生、中川先生、連携協力機関から熊本県生涯学習推進センター社会教育主事の大田黒先生、熊本市教育委員会生涯学習課長補佐の寺崎先生に、今年度の活動に対するコメントを頂戴することになっております。また、本日は、熊本県教育庁社会教育課長の小野先生に特別講演をして頂くことになっております。先生方、本日は宜しく御願い致します。

さて、今年の1月31日に中央教育審議会から、文部科学大臣からの諮問（平成22年6月3日）を受け、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）」（中央教育審議会教員の資質能力向上部会 平成23年1月31日）と題する報告書が公表されました。この中で、教員に求められる資質能力として、大きく二つの能力が唱われております。一つは、「高度な専門性と社会性、実践的指導力、コミュニケーション力、チームで対応する力」であり、もう一つは、「一斉指導のみならず、創造的・協働的な学び、コミュニケーション型の学びに対応できる力」です。特に、前者の能力を養成するものとして、これまで本学部が重視してきた体験型活動であるフレンドシップ事業は大きな役割を担っていると思われます。今後益々、地域の教育機関と連携を強化させて頂きながら、本事業を深化させて行く必要があると思われます。

最後に、本日までご出席頂きました先生方には、フレンドシップ事業の発展のために、今後とも変わぬご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますとともに、本日のシンポジウムが有意義なものになりますことを祈念致しまして、挨拶とさせていただきます。

フレンドシップの“感動”（10年度）

教育実践総合センター長 吉 田 道 雄



今年度は、“メイクフレンド”の皆さんが企画してきた“シンポジウム”を教育実践総合センターの“第14回公式シンポジウム”にジョイントさせました。今年度は“フレンドシップ事業”の中核組織である“メイクフレンズ”結成から10年が経過したからです。それにしても“メイクフレンズ”はすばらしい成長を続けています。

“メイクフレンズが誕生して10年になりました。それを記念して「同窓会」を開催したいのですが、ご出席いただけますか”。私のところにそんな案内状が届きました。旗振り役は初代のメンバーたちです。すでに子どもをもつ親になっていて子連れでやってくるというのです。こうしたお誘いにはすぐ乗ることにしているのですが、すでに予定が入っていて欠席することもけっこうあります。しかし、今回は幸いにも私のスケジュールとバッティングしていませんでした。そこで即出席の返事を出したわけです。その日が近づいてきたころ、出席確認の電話がありました。そこで“どのくらい集まるの”と聞いてみました。私はすでに還暦を超えてしまいましたが、昔の仲間が集まろうと声をかけても、まあ20人、せいぜい30人も参加すれば“すごいなあ”となります。ところが、電話から聞こえてきたのはなんと80人という大人数でした。それぞれが社会に出て10年にもなるというのに、子持ちの初代から現代まで80人ものメンバーが集結するというのです。もうそれだけで“メイフレ”の絆の強さというのでしょうか、とにもかくにも私としては驚くしかありませんでした。しかも、現在のメンバーたちも参加するというのです。同窓会と聞くと、先輩というか年配者たちが幅をきかせて、若い人たちが参加してもおもしろくも何ともない。そんな会合が多いのですが、これには感動しました。そして当日、本当に84人ほどが集まったのでした。しかも、自主的に“アルコールがダメな年齢の者もいますので、よろしくお願いします”と念を押すことも忘れない。建前からいえば、それは当然といえば当然のことですが、けじめもしっかりつけているところが“メイフレ”らしいとこれまた感動したのです。

今年は2つの公民館でジョイントする企画がありましたが、事情があって継続がむずかしくなりました。そこで私としては“この際、連携を解消しよう”と学生たちに伝えました。ところが、これに“大人の都合だけで止めていいんでしょうか。子どもたちは一緒に活動することを楽しみにしているんです”と反論されました。これぞ子どもの立場からの正論です。それを受けて、私は改めて両公民館のご担当者とお話をしましたが、最終的には、やはり“解消”ということになりました。しかし、このときも“大人の都合論”に痛く感動しました。メンバーはそうした気持ちで子どもたちと接しているのです。それは単に“子どもが好きだから”“子どもと遊ぶのが楽しいから”という動機をはるかに超えています。だからこそ感動が生まれるのです。“メイフレ”の皆さんは継続的に子どもたちと関わることで、こころの繋がりをまでも築き挙げている。最後もまた感動です。

I. メイクフレンズ活動の実施報告

メイクフレンズについて

全国国立大学教育学部において文部科学省が推進しているフレンドシップ事業は、さまざまな体験活動を子どもたちと学生がともに行い、ふれあう中で学生が子どもたちの気持ちや行動を理解し、実践的な指導力の基礎を身につけることをねらいとしています。

メイクフレンズは、このフレンドシップ事業の一環として行われた、熊本大学教育学部の授業から発展した学生主体の活動です。メイクフレンズでは、学生である私たちが活動を企画し、そしてその活動を実践したり、そこでの体験を振り返り見直したりすることによって、「子どもを見る目」及び「子どもの考えや行動を予測した企画」のレベルを向上させることを目的としています。現在、活動の場として、大江公民館、五福公民館、中央公民館、託麻公民館、東部公民館などの社会教育施設にご協力いただき、企画・運営を含めた大学外での体験活動を行っています。



2010（平成22）年度メイクフレンズ活動体系について

熊本大学教育学部2年 平 位 和 久

今年度は4つの公民館と提携させていただき、5班編成で活動を行ってきた。前年度までの流れを継いだ、子どもが主体となって企画・運営するプランナー班、学生主体の単発班に加え、新しくホール班を確立し、ホール開放事業にも今まで以上に力を入れた。

メイクフレンズでは、「子ども理解」を目的とし、自分達が企画した活動中の子どもの様子、学生の言動に対する子ども達の反応を“エピソード”として振り返り、共有している。この“エピソード”は同じ子どもの反応でも、学生によって感じ方が変わるため、それを共有することで「子ども理解」の幅を広げ、深めることが出来る考える。そのため、今年度は「つながりによる変化」を方針として、学生同士が積極的に関わり、お互いの意見を受け入れることで、学生それぞれが子どもとのつながりで得たものを確実に自分たちの中に蓄積していくことを目指した。その一環として、振り返り会や「しゃべり場」などを多く設け、学生同士が話す機会を増やしたり、振り返り会の形式を報告的なものではなく、より対話的なものにしたりすることで、理解が深まることを意識した。どの班も子どもを見る上での視点や、活動内容に新しい考えやアイデアを取り組もうとする姿が見られ、活動に対して積極的に取り組んできた。振り返りだけでなく、出来るだけ多くの学生達が一緒になって子どもと関わる機会を増やすなど、更に理解を深めていくために考え、実践していきたい。

メイクフレンズは来年度で12年目を迎える。今後も活動での子どもの「姿」を大切にし、子どもとの関わり、学生同士の関わり、メイクフレンズに携わっている全ての人との関わりから得たものを少しでも子ども達に還元していきたい。また、10年間かけて蓄積したものを無駄にしない為にも、今一度「メイクフレンズ」を見つめなおしていきたい。

最後になりましたが、今年度もメイクフレンズの活動にご理解をいただき、多大な支援をしてくださった公民館の先生方を始め、市や県の先生方、本当にありがとうございました。メイクフレンズという場を私たちに与えてくださっていることに心から感謝申し上げます。これからもご支援をよろしくお願いします。



2010年度 メイクフレンズ年間活動一覧

月	日	託麻	五福プランナー	五福ホール	中央	大江・お買いもの
6	12 (土)	開講式				
	20 (日)				世界でたった一つの絵本を作ろう ～ぼくたち、わたしたちだけの物語～	初めてのおかいもの～レッツチャレンジお子さまランチ～
	26 (土)	プランナー合宿 1日目				
	27 (日)	プランナー合宿 2日目				
7	3 (土)		プランナーお見知り会			
	10 (土)	プランナー会議	プランナー合宿 1日目			
	11 (日)		プランナー合宿 2日目			
	17 (土)			学びの広場理科 (ドライアイス)		
	24 (土)		プランナー会議			
8	7 (土)	プランナー会議	プランナー会議			
	21 (土)	プランナー会議		遊びの広場 紙ヒコーキ		
	24 (火)					夏なら阿蘇で遊ばな キャンプ 1日目
	25 (水)					夏なら阿蘇で遊ばな キャンプ 2日目
	26 (木)	あしきた夏物語 1日目			大地の恵みごちそうサマー	
	27 (金)	あしきた夏物語 2日目	やまがキラリ☆水でキラリ ☆君とキラリ☆			
9	4 (土)		プランナー会議	学びの広場 算数		
	11 (土)	プランナー会議				
	18 (土)		プランナー会議	遊びの広場 風船		
	25 (土)	プランナー会議				

月	日	託床	五福プランナー	五福ホール	中央	大江・お買いもの
10	9 (土)	プランナー会議	プランナー会議			
	16 (土)			遊びの広場 昔遊び		
	17 (日)		ハロウィンパーティー ☆クッキング			
	23 (土)	プランナー会議				
11	30 (土)	ハロウィンパーティー in たくま				
	13 (土)	プランナー会議	プランナー会議			
	27 (土)	プランナー会議	プランナー会議			
	11 (土)	プランナー会議	プランナー会議		びっくクリスマス!! ～あわてんぼうサンタからの招待状～	
12	12 (日)					初めてのおかいもの21
	18 (土)			学びの広場 音楽		
	19 (日)		牧場だよ 全員集合！			
	15 (土)			遊びの広場冬の犬運動会		
1	16 (日)	プランナー会議	プランナーお別れ会			
	22 (土)	さあ集まれ！わくわくハッピー金峰山 真冬のホットツアー				
	5 (土)	閉講式				
2	19 (土)			遊びの広場 ドミノ倒し		
	20 (日)				エコリンピック ～カレールーで救おう！地球の未来～	子ども建設 ～僕らの夢のマイホームを作ろう！

2010年度 メイクフレンズ外部依頼による活動一覧

月	日	依頼主	活動内容	活動場所
4	2 (金)～4 (日)	コミネット協会	でけでけキャンプ	阿蘇青少年交流の家
5	9 (日)	黒髪18町内子ども会	新入生歓迎会	黒髪小学校体育館
7	18 (日)	御幸西子ども会	夏のレクリエーション	
8	12 (木)～14 (土)	コミネット協会	どっとどっとキャンプ	菊池少年自然の家
	20 (金)～22 (日)	生涯学習課	大観峰チャレンジキャンプ	金峰山少年自然の家、あそ教育キャンプ場
10	23 (土)～24 (日)	生涯学習課	熊本城子どもわくわく体験学習	熊本城
	26 (火)～30 (土)	コミネット協会	天草しんわ通学合宿	
12	25 (土)	託麻西4町区子ども会	クリスマス会	託麻西小学校体育館
	25 (土)～27 (月)	コミネット協会	阿蘇民泊体験プログラム	阿蘇市
1	7 (金)～9 (日)	コミネット協会	ほくほくキャンプ	阿蘇青少年自然の家
3	13 (日)	帯山3町内子ども会	6年生を送る会	帯山地域コミュニティセンター
		秋津1町内子ども会	お別れ会	秋津1町内公民館

2010年度 活動報告

五福ホール班

〈前期を振り返って〉

班長 2年 戸 上 息 吹

2009年度まで単発班に含まれていたホールの活動が、2010年度からはホール班として独立した。前期では、「理科」「算数」という教科をテーマとして設定し、子ども達の好奇心を高め、学びの場となるような活動を企画する“まなびの広場”と、ホールという空間でのコミュニケーションを意識し、「紙ヒコーキ」「風船」という子ども達にとって楽しいと思えるようなテーマを設定して活動を企画する“あそびの広場”の活動を行った。

ホールへの出入りや活動への参加が自由という特徴があるホールだからこそ、子ども達のありのままの姿を見たいという願いから、活動の中に自由時間を設けることにした。そして、学生主導にならない企画で、自由に子ども達に楽しんでもらえる活動を目指した。班の話し合いをする上では、学生一人ひとりが五福の子ども達のことを考え、子どもの視点と学生の視点の両方を持ち、企画することができるようになった。

第2回あそびの広場では、異なる学年、男女がホールという空間で、楽しんで遊んでほしいという想いから、「風船」をテーマとした活動を行った。自由時間では、子ども達それぞれの興味に合ったことを楽しむ姿が見られ、学生企画の風船バレーでは、グループ内でお互いを気遣い、工夫しながら遊ぶ子ども達の様子を見ることができた。風船を2階から降らせた時は、子ども達から大きな歓声が上がり、大変印象的な瞬間となった。

どの活動でも子ども達の笑顔を見ることができ、その笑顔を見ると私達学生も嬉しくなった。そして、次の活動でも子ども達の笑顔を見られるように、少しでも子ども達にとって意味のあるものになるようにと、真剣に企画することができた。そして、ホールに来てくれる子ども達の実態に合わせた、ホールの活動の一つの姿を班員みんなで築くことができたと思う。このように、有意義な活動ができたのも、班員の協力と公民館の先生方のサポートのおかげである。これらの活動を通し、子ども達の様々な表情、笑顔を見ることができ、子ども達に寄り添うことの大切さを知った。

〈後期を振り返って〉

班長 1年 石 川 美由紀

後期五福ホール班では「あそびの広場」と「まなびの広場」という活動を企画・運営した。「あそびの広場」では「昔あそび」「冬の大運動会」「ドミノ倒し」を、「まなびの広場」では「音楽」を行った。

五福ホール班では、「自由」を意識して活動を行ってきた。そのため、子どもたちののびのびと遊ぶ姿を見ることができ、それが五福ホール班の魅力になっていたと思う。特に、「まなびの広場」の「音楽」では、「身近な音で音楽を楽しもう」という目的で活動を行った。内容としては、音あてクイズをしたり、身近なもので楽器を作り、それを使って合奏をしたりした。特別に楽器を用意しなくても音楽を楽しめるということを実感してもらうために、ボディパーカッションを取り入れたり、ペットボトルや鍋などの日用品を楽器作りの材料として用意した。子どもたちが様々な材料から、学生が思いもつかないような楽器を作りだし、それを使って楽しそうに演奏する姿が印象的であった。私は、そのような子どもたちの自由な発想や、子どもたちの笑顔を見ることができ、とても嬉しかった。

その反面、ホールの自由さが裏目にでてしまう活動もあった。話を聞いてくれなかったり、活動の途中で帰ってしまったりする子どももいた。子どもたちをどこまで自由にさせるべきなのかと悩んだ。しかし、そのような問題に対して班の中で話し合っていく中で、活動の自由度を下げることも、学生がいかに子どもたちの興味を引き付けられるかが重要だと感じるようになった。そのことによって、活動の導入により一層時間をかけて話し合いをし、工夫をすることができた。

この半期で様々な活動を通して私自身たくさんのことを学ぶことができた。これも班員と公民館の先生方のおかげである。これからも、子どもたちが楽しめる活動を子どもの目線に立って企画していきたいと思う。



五福プランナー班

〈前期を振り返って〉

班長 2年 百合本 悠 紀

前期五福プランナー班では、「プランナー合宿」「やまがキラリ・水でキラリ・君とキラリ」の二つの活動を中心に行った。今回空調工事の関係でプランナーの始動が七月になったこともあり、事前に様々なことを話し合えた。その中で特に力を入れたのが「年間目標」であった。事前アンケートで保護者の方の願いなども聞いた上で、私達は「協和」と「自信」という大きな柱をかがげ、子ども達にとって心の居場所になるようなプランナーにしたいという願いを持った。また、“子どもカルテ”をつくりその子どもの現状や気になった点、良いなと思った所などを活動毎に書きためていった。そのおかげで活動に参加出来なかった学生や違う班で班付きを行っていた学生も、その子についての現状を共有することが出来た。

「プランナー合宿」では、ミニ運動会や桃太郎のその後を創作した劇、風船バレーなど様々なレクリエーションを通して子ども同士の仲を深めたり、プランナーとはどういったことをするのか少しでもわかってもらう為に会議を行ったりした。お風呂上がりと一緒に七夕の短冊に願い事を書く姿や、帰りのバスで楽しそうに合宿中の秘話を教えてくれる姿など、スタート会ではあまり見られ

なかった子ども達同士の関わりをみることが出来た。

一つ目の企画である「やまがキラリ・水でキラリ・君とキラリ」は水場での活動ということで安全面などの対策や、タイムテーブルが詰まりすぎていたこと、レクリエーションで行ったサッカーでの男女間の熱の差など多くの反省が挙げられた。しかし、その反省を基に学生も子どもたちも、“プランナーとはなんなのか” “参加者を楽しませるってどういうことなのか”などを考える良い機会を持つことが出来た。

この前期を通して、例えば会議ひとつを作り上げるにしても、その形式や言葉掛け、資料の提示の仕方など、どうすれば子どもたちがわかりやすいかを考えて話し合いや工夫をしてきた。それはとても大変な作業でもあったが、同時にその一つ一つが目の前にいる子どもたちへの理解に繋がるものであったと感じた。これからも子どものことを考え、真剣に向き合っていきたい。

〈後期を振り返って〉

班長 2年 竹 下 孝 世

後期五福プランナー班では、「協和」「自信」の年間目標のもとに「ハロウィンパーティークッキング」「牧場だよ全員集合！」の2つの活動を行った。

「ハロウィンパーティークッキング」では、前回の活動でプランナーと一般参加者の立場があまり変わらなかったという反省から、プランナーが参加者を引っ張ってほしいという願いがあった。そのため、参加者の対象学年をプランナー全員より年下の小学校1・2年生とした。そのおかげもあり、準備の段階から「ここは1・2年生だと危ないからプランナーの私たちがしよう」と言って、参加者のことを考えている様子が多く見られた。活動当日、会議で考えたことを思い出しながら「次はこれをするよ」と言って嬉しそうに参加者を引っ張る姿はプランナーとして大変頼もしく見えた。「牧場だよ全員集合！」では、最後の活動だったので、前回の活動では達成できなかった参加者全員を楽しませるという目標を立てた。話し合いの結果施設内を巡る班行動を行うことになり、参加者を喜ばせるためにはどのように引っ張っていけばよいのかを考えた。その甲斐あって、活動では参加者の意志を聞いて行動できているプランナーの姿が見られた。このようなプランナーのが



んばりのおかげで、活動アンケートでは参加者全員が「楽しかった」に丸をつけてくれた活動となった。

この1年の活動を通して、初めはなかなか自分の意見を言えなかったり、自分の意見ばかりを主張したりしていた子たちが、次第に自分の意見をはっきり言えるようになったり、他人の意見に耳を傾けるようになったりするようになった。これは年間目標の「協和」にある「他者を受け入れ、他者に受け入れられる」関係が築けたからではないかと思う。関係を築いたのは子どもたち自身のおかげであるが、その環境づくりが少しでもできたことをうれしく思う。この経験から、さまざまな事情を抱えている子どもたちにとって、誰かに受け入れられることを感じさせることはとても大事なことであった。これからも、このことを子どもに感じてもらうために自分には何ができるかを考えていきたい。

中 央 班

〈前期を振り返って〉

班長 2年 陣 内 直 子

前期中央班では6月に「世界でたった1つの絵本を作ろう」、8月に「大地の恵み ごちそうサマーバスツアー」を企画し、活動を行った。どちらの活動も子ども達が家や学校でできないこと、これまでのメイフレの活動でもしたことがない事に挑戦するという趣旨のもと企画を進めていった。

6月の活動では、小学校3～4年生を対象にして班で広用紙見開き1ページずつ作成し、1つのオリジナル巨大絵本を完成させた。学生で考えた絵本のあらすじに沿って班でそれぞれ新たに話を考えページを完成させていくのだが、子どもによってアイディアを出す子や考え込んでしまう子もいて、なかなか難しいようだった。制作の時は子どもが一生懸命になりすぎてトラブルも起こってしまったが、班の皆で協力して絵を描いていた。完成した巨大絵本を読み聞かせる時、子ども達が嬉しそうに、真剣に絵本を見ている表情がとても印象的だった。この活動を通して子どもの発想力・創造力の凄さを感じ、子どもの持つ力をもっと発揮できるような活動を考えたいと思った。

8月の活動でも小学校3～4年生を対象に、そよ風パークという施設でトマト収穫をし、そのトマトを使ってハヤシライスを作るという活動を行った。バスを使った活動ということで企画を進めていたが、バスで行ける範囲に目的と合致した場所が見つからず、結果として目的と実際の活動企画にズレが出てしまった。活動本番ではトマト収穫の時に、子ども達が喜んでトマトを収穫しに行く姿や、赤いトマトと黄色いトマトの味の違いを感じる姿、一生懸命ハヤシライスを作っている姿が見られた。しかしながら活動を終えて目的を達成できたかは疑問が残り、この活動の一番の反省点であり課題だと痛感している。

前期の活動を振り返ると改めて目的の大切さ、班員相互の意識共有の大切さを考えさせられた。これからも様々な活動があるので、以上の2点を意識しつつ色々な活動にチャレンジしていきたい。

〈後期を振り返って〉

班長 2年 山 本 寛

後期中央班では12月に「びっくクリスマス！～あわてんぼうサンタからの招待状～」を、2月に「エコリンピック～カレーで救おう！地球の未来！～」の二つの活動を行った。

12月の活動では、小学校1～3年生を対象にとにかくクリスマスを楽しんで、子どもたちにとって思い出に残るような活動にしたいと考えた。そこでより思い出に残るよう活動時間を夜にしたり、鳥の丸焼きを作るなどインパクトを重視したプログラムを考え、また、参加者同士で楽しいと思う

気持ちを共有することができるように企画をした。その他にもキャンドル作りやリース作り、部屋の飾り付けを行い、活動中は終始クリスマスの雰囲気を保つよう意識した。プログラム内容が盛りだくさんで、参加者の疲労や飽きを懸念していたが、常に参加者は笑顔で学生扮するサンタやトナカイと触れ合いながら、非常に楽しんでた。活動の最後のアンケートでも参加者全員が楽しかったと書いており、学生のねらいが反映され、子どもたちにとって心に残った活動になったであろう。

2月の活動ではエコをテーマに、小学校4～6年生を対象に「資源を大切にする気持ちを持ち、これからの生活に役立てる」という目的を立て買い物、調理、片付けとプログラム毎にエコの観点を持ち行動しているかを各班の審査員がポイントを付け、班対抗で競わせた。またその後のレクでは、その日実践した事を書かせたり、クロスワード形式にして意識や知識の定着化を図った。活動中は参加者が班員全員で知恵を絞り競い合う中で、環境に配慮しようとする姿が見られた。特に調理や片付けの時は使用できる水を与えられたペットボトルの中の水とすることで、使う中で減っていく水の量を視覚的に捉える事ができ、普段の生活の中でどれだけ水を使っているかを実感し、必要最低限の水しか使わないよう各班アイデアを出し合い意欲的に競っていた事が印象的であった。

最後に、私たちが活動を企画・運営する上で諏訪園先生をはじめとする中央公民館の先生方には多くのご理解、ご協力を頂いた。感謝の意を表すとともに、今年度の貴重な経験を来年度以降活かしていきたい。



大江おかいもの班

〈前期を振り返って〉

班長 2年 代 口 成也

大江おかいもの班では、班全体の目標として「子どもも、学生も楽しく」を設定して半年間活動した。この目標には子どもが楽しんでいる姿をみて学生も楽しみ、その姿から各々が様々なことを学んでいきたいという学生の思いが含まれている。

一回目の活動は「はじめてのおかいもの」を託麻公民館で行った。毎年恒例となっているこの活

動だが、今回は子どもたちに親しみはあるけれども、作ったことのない料理を作りたいという学生の思いから「お子様ランチ」を作ることになった。本番では子どもたちに自分の作ったオムライスにケチャップで絵を描いてもらった。そうしたところ、自分の料理に愛着が湧き、学生に自慢して歩いていた子もいた。少しの工夫で子どもたちがこんなにも喜んでくれるのなら、もっともっと楽しめるように話し合っていこうと思える瞬間だった。

二回目の活動では「夏ならあそで遊ばなキャンプ」と銘打って大江公民館主催で阿蘇の青少年自然の家でキャンプをした。この活動は最近の子どもたちは自然の中で遊ぶ環境に恵まれていないので、もっと自然に親しみを持ってほしいということで野外活動を中心に企画した。阿蘇の大自然を前に子どもたちはとても大はしゃぎで、草原での自由時間では寝そべって転がってみたり、バッタを捕まえてみたりと本当に自由に遊ぶ子どもたちの姿を見ることができた。また二日目のプログラム「沢遊び」では水の冷たさに驚きながらも、全力で遊んでいた。子どもたちにつられて、学生も疲れを忘れて楽しむことができた。

私はこの二つの活動を通して学生が活動中はもちろん、企画の段階でも子どもたちからエネルギーをもらっていることを強く実感した。そして子どもたちの笑顔に支えられながら学生も大いに楽しむことができたので、「子どもも、学生も楽しく」という目標も達成されたのではないと思う。

〈後期を振り返って〉

班長 1年 指 宿 紗 織

後期大江おかいもの班では12月に託麻公民館で「はじめてのおかいもの21」を、2月に大江公民館で「子ども建設～僕らの夢のマイホームを作ろう!」という活動を行った。

「おかいもの」では、これまで調理をメインにすることが多かったが、今回は初めてできた喜び、みんなでできた喜びを感じて欲しかったため、買い物をするということにもこだわり、品揃えもよく広いお店を選んだ。また、調理では、作るものを餃子1品に絞ることで、子どもたちが自分のペースで作業を進められるようにしたり、普段あまり意識しない調理中の音や匂いも大切にしたりした。各班



の調理台に炊飯器を設置したところ、子どもたちから自然と「あ！湯気が出てるよ！」という声や、炊飯器の蓋を開けた瞬間のお米の炊けた匂いに歓声を上げる様子が見られた。また、餃子を焼く時に入れた水のジューッという音にも反応し目を輝かせていた。この活動を通して、環境を整えてあげれば、学生の声かけなしでも、子どもたちは自分たちだけでいろいろなことに気付けるということ、大切なのは何を作るかではなく、どう作るかだということを学んだ。

「子ども建設」は、子どもたちがのびのびと自由に表現できるようにしたいという思いから、段ボールを使って家を作った。段ボールは余裕を持って集めたが、装飾品は何をどれだけ使うかが予想できず、不足した場合を心配していた。しかし、不足した材料は、別の材料を組み合わせで代用しており、子どもは子どもなりに工夫して作り上げられるということを教えられた。また、私たちは異学年ならではの交流をさせたかったため、対象学年を小学生全学年にした。しかし全学年に対応できる導入や、作業中の子どもへの接し方などを考えるのが難しく、レクもレベルを変えてする必要があった。また、1年生と6年生では興味や物事の捉え方など、様々な面で大きな差が生まれてしまうので、活動内容によっては、全く同じことをするのはとても難しいのだということを学んだ。

最後に、私たちの力だけでは活動は成り立たない。いつも協力して下さる先生方には本当に感謝の気持ちでいっぱいである。そのことを常に忘れずこれからも活動を考えていきたい。

託麻プランナー班

〈前期を振り返って〉

班長 2年 外戸保 香菜子

前期託麻班は、「TEAM17ベアーズ」として6月に「開講式」「金峰山プランナー合宿」8月にプランナーが初めて企画に携わった「あしきた夏物語」を行った。

「金峰山プランナー合宿」では、レクリエーションや野外調理、室内ハイク、プランナー会議、旗づくりを行った。開講式の時点ではまだまだ緊張気味だったプランナー達も、寝食を共にするなかで仲が深まっていった。初めてのプランナー会議では、子どもたちの意見がぶつかったりなかなか会議に集中できなかったりする場面も見られた。しかし子どもたちはまずプランナー会議がどのようなものであるかを体験でき、学生は会議での子どもたちの様子を知ることができた。子どもにとっても学生にとってもTEAM17ベアーズの本格始動に向けて有意義な合宿となった。

「あしきた夏物語」では1泊2日で熊本県立あしきた青少年の家に行き、プランナーが企画した海辺での活動、ナイトハイク、ウォークラリー、海水浴を行った。子どもたちは初めて参加者の前で説明をするということもあり委縮してしまう様子も見られたが、それでも会議を重ねてきた分プランナーとして自分の仕事をしっかりと果たそうとする姿勢が多く見られた。また参加者との関わりを通して、少しずつ自らがプランナーであるということを自覚し始めたようにも感じた。自分たちの企画したプログラム以外では、まだまだ参加者に楽しんでもらうというより自分自身が楽しみたい、という気持ちが強く出てしまう部分もあった。しかしまだスタートを切ったばかりなので、学生としては子どもたちが今後どう成長していくのかとても楽しみに思うと同時に、どうサポートしていくべきなのかを考えさせられる活動となった。

1人1人の子ども、学生としっかり向き合っていこうと思えば思うほど、悩むことも多かったが、たくさんの人に支えられ班長をやり遂げることができた。この経験を今後しっかりと活かしていきたい。

〈後期を振り返って〉

班長 2年 奥村 優

後期託麻班ではプランナーが企画した「ハロウィンパーティー in たくま」と「さぁ集まれ！わくわくハッピー金峰山 真冬のホットツアー」の二つの活動を実施した。

「ハロウィンパーティー in たくま」では、デコレーションケーキ作り、衣装作り、室内ウォークラリー、パーティーを行った。プランナーはプログラムの流れと、ウォークラリーでのチェックポイントのレクリエーションを主に企画した。前期の反省として、自分が活動を楽しむことに意識がいったしまったということが挙がっていたので、今回の活動では事前の準備や練習などを入念に行うことによって、参加者をおもてなしするという意識で活動に臨めるように心がけた。その結果、デコレーションケーキ作り等で、率先して作業を行うなど参加者をひっぱっていこうとする姿が見られた。

プランナー最後の活動である「さぁ集まれ！わくわくハッピー金峰山 真冬のホットツアー」では、企画段階から参加者を意識してほしいという学生の思いにより、対象を低学年に設定した。おかげで、会議のときに進んで低学年の子の体力や技能などを考慮した意見を多く出してくれるようになっていた。今までは参加者に声をかけることを躊躇しているようだったが、今回の活動では、野外調理活動の際に「次はこうするんだよ。」と参加者に対して自然と声をかけることができていた。このような、企画から本番まで参加者に楽しんでもらおうとがんばっている姿から、今までの集大成としてのプランナーの成長を感じることができ、とてもうれしかった。

初めのころは、自分のことだけでいっぱいだったプランナーの子たちも、活動を重ねるごとに他の人の意見を尊重するようになったり、参加者が楽しめるように心がけたりと、驚くほどの成長を遂げていった。何人かのプランナーから、また来年もこのメンバーでプランナーをやりたいという声を聞いたとき、なんともいえない気持ちになった。私にとってもこの1年間は子どもたち一人一人に対してじっくりと向き合うことができる貴重な経験となった。



第14回教育実践総合センター教育研究シンポジウム 「子どもたちとの関わりを通して育つ学生たち」 フレンドシップ事業の現状と展望

開催要項

日時： 2011（平成23）年 2 月28日（月） 10：00～16：30

場所： 熊本大学教育学部 3－A教室・3－B教室

【午前の部：シンポジウム 教育学部 3－B教室】

1. 開会挨拶 10：00～10：10

熊本大学教育学部長

登 田 龍 彦

2. メイクフレンズ活動の実施報告 10：10～11：10

(1) メイクフレンズ活動全体の振り返り

メイクフレンズ船長

平 位 和 久

(2) 班活動の振り返りとコメント

メイクフレンズ「五福ホール班」班長

(前期) 戸 上 息 吹

(後期) 石 川 美由紀

メイクフレンズ「五福プランナー班」班長

(前期) 百合本 悠 紀

(後期) 竹 下 孝 世

メイクフレンズ「中央班」班長

(前期) 陣 内 直 子

(後期) 山 本 寛

メイクフレンズ「大江・お買い物班」班長

(前期) 代 口 成 也

(後期) 指 宿 紗 織

メイクフレンズ「託麻プランナー班」班長

(前期) 外 柙 保 香菜子

(後期) 奥 村 優

熊本市五福公民館社会教育主事

江 川 義 友

熊本市中央公民館社会教育主事

諏訪園 勉

熊本市大江公民館社会教育主事

魚 住 敏 彦

熊本市託麻公民館社会教育主事

中 川 正

3. 連携協力機関関係者からの今年度の活動に対するコメント

11：10～11：20

熊本県生涯学習推進センター社会教育主事

太田黒 保 宏

熊本市教育委員会生涯学習課課長補佐

寺 崎 真 治

4. 特別講演 11:30～12:20

熊本県教育庁社会教育課長

小 野 賢 志

5. 修了証授与ならびに閉会挨拶 12:20～12:30

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長

吉 田 道 雄

6. 連携協力機関関係者との企画運営協議会 12:30～13:10

連携協力機関関係者

熊本大学教育学部教員

【昼食】

【午後の部：学生自主企画分科会 教育学部3-A・3-B教室】

7. 分科会の開会式 13:15～13:30

分科会実行委員長

坂 口 小夜子

8. テーマ別分科会 13:30～16:10

「つながりを広げる」という目的のもと、普段の活動において気になっていることなどの中からいくつかを取り上げ、それらを班ごとのテーマとして意見交換を行う。これを機に、一人一人が今まで以上に、普段からメイクフレンズについて話ができる関係をつくる。

移動・準備	(10分)	13:30～13:40
意見交換会	(40分)	13:40～14:20
休憩・教室移動	(15分)	14:20～14:35
分科会	(85分)	14:35～16:00
移動	(10分)	16:00～16:10

9. 分科会の閉会式 16:10～16:30



特別講演 熊本県教育庁社会教育課長 小野賢志先生

Ⅱ. 分科会の実践報告



メイクフレンズ学生自主企画分科会

1. 目的『つながりを広げる』

班での話し合い以外でもメイクフレンズについての話ができる関係を“つながり”とし、この“つながり”をもっと広げてほしいという思いからこの目的を立てた。

2. 分科会で取り扱うテーマについて

話しやすい雰囲気を作るためには、テーマもみんなが話しやすいものにするべきだと考えた。そこで、「みんながメイクフレンズについて今一番話したいことは何ですか」というアンケートを全体会で行った。その集計結果を分類し、さらにその分類の中から話したいものを選んでもらい、5つのテーマを設定した。この5つのテーマから希望調査をし、班構成を行った。なお、このアンケートでは希望調査とともに、具体的に話したいことも書いてもらった。

1 班：目的について

目的の重要度について、など

2 班：子どもの実態について

今の子どもたちに足りないものについて、など

3 班：子どもと接する上で（A）

子どもと接する上でのこだわりについて、など

4 班：子どもと接する上で（B）

学生の立ち位置について、など

5 班：班の運営について

班長・副班長・班員とのかかわりについて、など

6 班：メイフレとは（A）

子ども理解について、など

7 班：メイフレとは（B）

メイフレの魅力について、など

実施計画

1. プログラム

- 13:15～ 開会式
13:40～ 『子どもの実態について』の意見交換（40分）
14:20～ 休憩（15分）
14:35～ 分科会（85分）
16:10～ 閉会式

2. 『子どもの実態について』の意見交換の班構成

【1班】（3－B教室）

- 1年 石川 美由紀 指宿 紗織
2年 坂口 小夜子 代口 成也 中島 恵
3年 明瀬 麻美
4年 岩永 拓実

【2班】（3－B教室）

- 1年 古閑 彩香 山口 郁彦
2年 伊藤 毅尚 柿原 智明 平位 和久
4年 内田 千晶 古閑 尚子

【3班】（3－B教室）

- 1年 内田 開
2年 丹波 美耶子 西留 翔也 百合本 悠紀
3年 勝間田 あぐり
4年 橋爪 健太

【4班】（3－B教室）

- 1年 福田 将真 弓削 朋未
2年 井戸 伸之 田端 万莉 米岡 有紀
4年 櫻井 寧人 小倉 久美

【5班】（3－A教室）

- 1年 添田 翔太
2年 竹下 孝世 戸上 息吹 山下 雄太郎 山本 寛
4年 奥田 美沙子 平坂 千明

【6班】（3－A教室）

1年 森 優太

2年 梶原 まどか 陣内 直子 外戸保 香菜子 山内 悠加

4年 川口 彩菜 小迫 敬文

【7班】（3－A教室）

1年 森田 大介

2年 奥村 優 長野 優紀 福本 祥大

3年 姫野 祐輝

4年 小山 美紗都 坂崎 亜衣

3. 分科会の班構成

【1班】目的について（3－B教室）

1年 石川 美由紀

2年 柿原 智明 竹下 孝世 長野 優紀 平位 和久

4年 小迫 敬文 橋爪 健太

【2班】子どもの実態について（3－B教室）

1年 弓削 朋未 山口 郁彦

2年 梶原 まどか 戸上 息吹

3年 勝間田 あぐり

4年 小山 美紗都

【3班】子どもと接する上で（A）（3－B教室）

1年 古閑 彩香 添田 翔太

2年 坂口 小夜子 外戸保 香菜子 丹波 美耶子

4年 岩永 拓実 小倉 久美

【4班】子どもと接する上で（B）（3－B教室）

1年 福田 将真 森 優太

2年 伊藤 毅尚 中島 恵 山下 雄太郎

4年 奥田 美沙子 坂崎 亜衣

【5班】班を運営する上で （3－A教室）

1年 指宿 紗織 森田 大介

2年 陣内 直子 田端 万莉 西留 翔也 福本 祥大

4年 平坂 千明 古閑 尚子

【6班】メイフレとは（A） （3－A教室）

1年 内田 開

2年 井戸 伸之 奥村 優 山内 悠加 山本 寛

3年 明瀬 麻美

4年 内田 千晶

【7班】メイフレとは（B） （3－A教室）

2年 代口 成也 百合本 悠紀 米岡 有紀

3年 姫野 祐輝

4年 川口 彩菜 櫻井 寧人



1班:

みっきー、かきー、たかふく、かす”
ゆうき、しーじ、けんけん、

テーマ「目的について」

目的と活動内容どちらが先か

- ・講義では、活動内容よりも目的から立てるべきとあるときいた。でも、漠然として立てにくい...
- ・単発班は、子どもの姿から見える状態であつ、自叙の状態から目的を立てるのは難しい。
- ・以前、話し合いの途中で目的を変えた。“おしゃべり”という意見があつた。転成するのでは?
- ・プログラマーは、その性質上、目標も最初から立てる。単発の活動は、“協が”という目的を立てたとしてもよいとある。これを誤りとも活動はしほれないのではなか。
- ・プログラマーは子どもの姿から見えるから目的は立てやすい。
- ・目的を先に決めるといい活動もある。
- ・活動から決めると大事な時に立ちかえれはよいのでは。
- ・個人的には、「目的」が先であつてほしい。
- ・みんなの中で共通意識をもてほしい。
- ・話し合いの中で、子どもたちがこういうことを感じてほしいとか。

子どもの姿から見える中では目的を立てるか

- ・今までの振り返り、エクササイズから考える。
- ・活動経験から考える。

プログラマー活動においてプログラマーの目的だけでなく参加者の目的も立てるべきか

- ・プログラマーに対しては、こうやってほしいなという思いはあるけど、一般参加者に対しては、どう関わりたいのか/分岐するよ。
- ・参加者はプログラマーの成長のため...
- ・参加者は楽しんでいるのか...

参加者の目的も立ててみるはどうか。

今までの振り返り、エクササイズ、プログラマーの目的も立てるか。

最近の目的はざっくりしているのではなか

- ・もっと具体的に近づけていくためのことは、
- ・“この部分を見たい”とか。
- ・活動の成功と目的の達成は違う。
- ・子どもが活動に果たす目的達成をまたとて言えるような目的をよめか。

“この活動を通してほしい”という目的。話はずいぶん、実際には、子どもがどう感じたいかは私が見えてこない。

→ アポート → 作り出すこと。アポートだけでなく活動中の子どもの様子からうかがえるのではなか。



★2班:

とも, 山ちゃん, バッシー
まろ, あく⑥, チャッピー⑥, おーやん

①前半の話から、自分が

興味深い話について～

- ・系統のつながりが薄い。その町の環境で遊びが異なる。
- ・自分たちもゲームをしていたし、今も子どもは抵抗なくしている。親同士のかかわりが薄く、子どもの集まる場所が減ってしまっている。
- ・親の仕事も変わり、子どもが一人に居ることが多く、そのため遊び方が変化している。
- ・子どもが話題に持ち出すものは変化して、それ自体は変わっていない。地域・場所の変化で子どもが変わっている。
- ・兄弟がいるのといないのでは子どもはちがう。
- ・10年、子どもは変わっていない。子どもが変わってきた話はいつも出る。
- ・習い事は週1のレベルが、今では毎日何か習い事をしている。家は近くても、子ども同士遊ぶところがない。環境が時間や場所を子どもから奪っている。

まとめ 子どもを取り巻く環境

(社会の変化、親の仕事の変化、遊び道具...) が変化しているだけで、子どもは変わっていない!

まとめ

7-2

～子どもの実態について～

② 子どもにどんな力(体験、活動)が必要?? ～

- ・自然体験会の場合
- ・子ども同士がなごむ場 → 同学年、異学年
- ・ゲーム機がなく、他の遊び方を知ってほしい

でも、実際は...

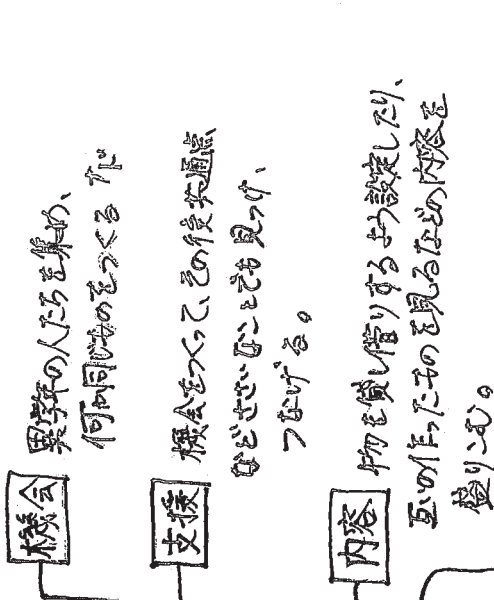
縦割り班で異学年を混ぜる班があるが、上の学年の子を怖がっている。せわしく交流の場があるのに...

誰かに言われる訳でなく、下の学年の子を世話する上級生はいらるよ。時に、人数が少なく子ども同士お互いを知っている時は、進んで世話をしたがる。

お互いを○○さんと呼びまじつなど、決められてしまっている。これは、仲間づくりをするにあたって、段階をとばされてしまっている。

面倒くせや仲間が生じて、子ども太も関わりが減ってしまっている。

What Can We Do?



③ へ班で流れる目標って目の前の子どもに合っているの?? ～

目標にのり、自分の考えに接し方がある、その子に合った接し方をするのが

子どもは一人一人ちがうから、その子に対応した思いをもて接するべき。何を望んでその子が来たのか(自分からい、だから、その子が今日一日来ようとした、思い、その子の内面に寄り添って活動したい。

単発の活動力は、より子どもの実態の幅が広がる。

3班

さや・てんでん・そちゃん・さよ
たんぽぽ・たくん・おぐみ

<叱り方>

- ・どんな時に叱る？
- ・怪我をしそうな時、こせそうな時。
- ・言葉づかいが気になる(暴言)時。
- ・ゲームやipodを活動中に使用した時。

五福

ホールの途中でゲームをする子がいて
注意すべきか迷った。

ゲーム機器類は注意すべきか？

・事前にルールとして使わないと決めて
おさ、使った時は注意する。

・ゲームに気をとられないほどの面白い
活動を企画する。

叱り方

- ・声のトーンを変える。
- ・どうしてそうしたのか「理由」や経過を
きちんと聞く。
- ・「そんな言い方をして自分ばかりいい？」と
子ども自身に考えさせる声かけをする。
- ・班ついで、叱る役とフォロー役を決め、
叱ったあとフォローもできるように
しておく。(役割分担)

テーマ【子どもと接する上で】

<ケンカが起った時の対応>

エピソード 班でケンカになり男の子が
1人班から外れた。裏方の学生がそばに
ついて話を聞き、2時間後ようやく
班に戻った。

・子どもが1人になり、泣いた場合
学生が付き添うべきか？

・子どもたちに任せて話し合いで
解決させるのもありだと思ふ。

・裏方の学生に入ってもらい、
付き添ってフォローする。

・学生が付いて、話を聞く。

【公民館の先生の対応】

「たいた(という事実がある)のだから
とりあえず謝ろうか」と優しくフォローし、
子ども同士で解決させる。

<子どもと接するときの心得>

- ・きつさを見せない。常に笑顔。
- ・子どもが何を感じているのか、常に考える
- ・子ども自身で考えて動けるような言葉かけをする。
- ・来しむ!!
- ・子どもの表情、しぐさ、周りの環境をしっかりと
見る
- ・ネタで会話をしはらせる。いろんな子と話す。

<裏方の関わり方>

・ケンカや困ったことが起きたとき
フォローに入る。

裏方：班から帰っているため、
事情や背景がつかみにくい。
どうしたらよい？

・子どもの表情をよく見ておく。

・気になることがあったら、すぐに班ついでに連絡。

・子どもが帰ってきた場合、遊んだ話をしつ
するが、ある程度使ったら班に戻すことを忘れない。
・常に動き、いろんな班の様子を見る。

まとめ

・裏方は全体を見る!!

・班ついでが見れない細かいところを見て
班ついでに連絡・フォローする。

<子ども同士をつなぐ支援の仕方>

- ・まず学生と子どもが仲よくなり、子どもたちの「共通点」を見つけ、
つなぐ話題にする。
- ・放置する ※ 子どもだけで話そうと判断した場合、
※ ただ放置するのはよくなく、課題や指示を出しては
めとは子どもだけで進めて仲良くしている。

・学生がいろいろ入って邪魔なところもあるから、
見守る。

盛り上げバリエーション

テーマ:「子どもと接する上で」

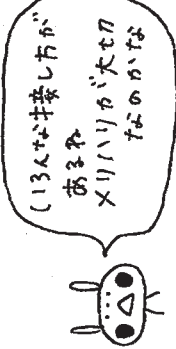
4年生 モリゾー、福ちゃん、チエック、めぐ、(同)やまゆう、うさこ、(書)ざっきー



ロってたり注意したりする時の接し方

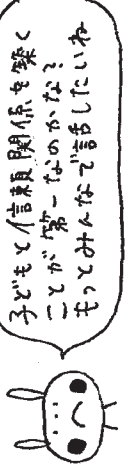
① どんなふうにロてる？注意する？

- ・なんぞ「その子が」そういうことをするのかが、
→ 背景を考える
- ・ロてる基準は「ないけど」...
・危険なことをした
・他の子を傷つけたなど
- ・ロてる時は...
・理由を聞く
・自分の気持ち(思い)を言う
- ・子どもと同じ目線に立つ
- ・子どもに聞く
「なんぞロ呼ばれたかあはは？」
→ 本人がわかってるが聞く



② 子どもと仲よくなりたい、厳しく言えない...

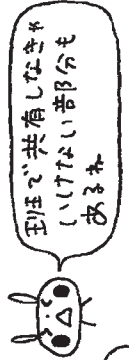
- ・仲よくなりたい、
きらあれたくない...
→ 子どもにも「それは成長してももらいたい」
ダメなことはきちんと言わなきゃ
- 単発だと特に難しい
きらあれたくないと思うことはなかった？
- 活動かに来てくれた子たちだとありきることができていたかも...
- ・メイフレって...
・先生にならなための場
→ 先生のような接し方
純粋に子どもと仲よくなりたい
- ・接し方も変わってくる
・信頼関係ができたと思う時は「きちゃんとロてること」ができる



子どもと接する上でのこだわり、やっていこと

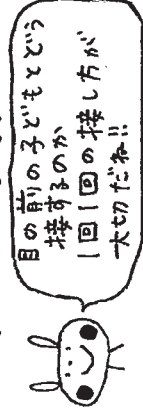
③ こだわり、やってることってある？

- ・牛時にはない？
→ 活動か前は決めていても(おぼろげとあまり考えてない)
- ・目的が「達成」できるように考えていた時もあったけど...
→ 今は信頼関係を築く仲よくなことに傾斜してる
- ・子どもに自由にさせようにしたい
→ でも目的に合わせてしまふこともある
- ・活動中は目的を重視してない
→ でも活動か前に目的をあげることには大切
→ 活動中は無意識に目的を守ってる？
→ タイムテーブルの中に目的は入ってる



④ 活動かによって変わってくる？

- ・プランナー... | 人の成長をみようにしている
単発... ふだんの遊びでみているような顔をみれるように「い」が「け」来てよかったと思ってもらう
- ・通学合宿... ふだん親にしてもらうことをする
→ 活動か目的が「近い」
活動かをすれば「目的達成」
- ・子どもたちには「任せ」
→ 任せ
→ 自然に子どもが「活動か」できる環境をつくる
・プランナー
→ 今回ほどまでやってほしいということがある
→ そのことを意識してしまっても、子どもの「自然」の声も聞きたい
活動かによって子どもたちもさまざま...



5 班 「班の運営について」

メンバー：どめっち、ばたやん、じんなお、よっしゅ、もった、いぶ、よえ、こがちょん

1. 班長、副班長の役割、それぞれの位置付け

- ・班長にまかせっきりになっていた。
- ・班長と話し合う時間を設けていた。
- ・普段の話し合いの様子だけでは、班長が裏でどんな仕事をしているのかが分からない。班長のすべき仕事は何なのかよく分からない。
- ・経験不足のため自分の意見に自信が持てず、班長をしていても先輩からの意見に流されてしまいがちだった。

・話し合いをする前にその日の話し合いの流れを班長、副班長で確認するようになっていた。

・メンバーが決まったら、具体的にそれぞれの役割を決める。



盛り上がった!!

2. プランナーと単発の話し合いの進め方の違い

・プランナーは一年間同じ班に所属する人が多いため、それぞれの性格がわかりやすい。しかし、単発はメンバーが変わりやすいので相互理解するための時間が不十分だと感じる。

- ・単発にはほかのことで忙しい人が集まってしまう傾向があるため、時間の調整が難しい。
- ・重要事項（目的など）はメンバーがそろわないと決められない。

3. 来れない人への情報提供

- ・目的や意識のズレをいかにして埋めるかが難しい。

- ・ズレがあったがために活動直前に目的が変わってしまった。妥協や時間不足で変えざるを得なかったことに後悔。

・班長がその日の話し合いで決まったことをメモリスで回していた。しかし、細かい部分が伝わりにくいため、重要事項は全体で決めた方が良かった。

・来れない人へは電話連絡や重要部分だけをまとめたノートのコピーを渡すようにした。しかし班長、副班長への負担は大きかった。

・来ていない人にこれまでに決まったことを話し合いの途中で伝えていくのは大変。最初にそういった役割を決めておくと負担が減るのでは。

・連絡して話し合いの前に伝えるようにしていた。しかし後輩から先輩に「来てください」というのは言いにくい。

- ・先輩の方からのアプローチが必要。

4. 公民館の先生との連絡方法

- ・副班長が班長の代わりに連絡するのはだめなのか。
- ・代表者を決めておく方が、公民館の先生への負担を軽くすることが出来る。
- ・代表者も初めに決めておくのと良い。

5. 後期に1年生が班長をすることについて

- ・1年生の間は子どもと触れ合うことを大切にしたい。
- ・裏方として子どもたちと接することも子どもも理解に繋がるのでは。
- ・周りからのサポートが必要。

6. サポートとは

- ・班長、副班長と班員との間にパイプ役となる人が

必要。

- ・単発だと互いのことが十分に理解するための時間が足りず、サポートがしにくい。

・班長、副班長にとって頼れる人、相談できる環境が必要。



盛り上がった!!

7. 話し合いの方法について

- ・たたき台となるものを作って、意見を出しやすくする。
- ・一人一人に発言してもらえよう、当てる。
- ・こだわる部分が人によって異なる。
- ・話し合いの中で区切るところが分からない。
- ・両極端な意見をまとめるのが難しい。
- ・先輩からのサポートで「今までのところをまとめると?」があって助かった。
- ・それぞれの意見のメリット、デメリットを出し合い、良いところを組み合わせ、見極める。
- ・優先順位を目的に合わせて決めておく。
- ・論点を整理しておく。
- ・みんなで大事なところを共有して決定する。
- ・話し合いの方法を共有する。

・1年生は前期の経験がなく、話し合いの方法を知る機会が少ない。

・運営方法について理解できるよう、運営について話す場が必要。



盛り上がった!!

- ・他班の話し合いを見学できる留学制度の導入。
- ・記録ノートを参考に、話し合いの回数の目安などを決めると良いのでは。



6.7班:

かい、ばんぐら、ひろ、のび、^(書補)うっちー

せーや、ゆりも、あかり、ひめ、かれ、さーくん

「メイフレとは？」というテーマの中でも、今回は「メイフレの魅力」について話してみました!!

メイフレってとにかく楽しい... 企画からではなく、活動にもっと力を入れたらいいと思っただけでしようか? だけど、今、私たちが、企画から四苦八苦しながら頑張っているのは、なぜなのでしょう...

やめなから理由 魅力 ~ 魅力 ~

- ① 縦と横のつながり。自分の居場所がそこにある!
- ② メイフレでやっていること、経験が役に立つと思う。
- ③ 自己成長できる場、それだけの価値がある!
- ④ なんといえども子どもの奥底力! 予備も学生と、それぞれが影響しあい、学びや感動が生まれる
- ⑤ 学生との関わりが楽しい
- ⑥ きついことがあっても飲み会がすべいのチとよんでいる
- ⑦ 先輩や同級生の素敵さ♡ 心を開くことができる!

まとめ

メイフレの魅力は様々...

メイフレに求めるもの、求められるもの
いろんなものが交錯して、悩みながらも
メイフレに向き合っている人々、それ自体が
魅力です♡

たしかなこと

- ① 悩みや不安を打ちあけることができる。普段のメイフレの話し合いも深くすることが出来る。
- ② 自分で作っている壁は自分でしか崩せない。
壁がぶ壊れるとはつまり、自分の伝えたいことを話せるようになるということ。
- ③ 逆に...
誰かの壁を崩したいとき
④ 何か活動がある度に、負にかけて話しかける!
→ 心の支えになる
- ⑤ みんな責任感が強い!!

まとめ

大切なことは「飲みニケーションをとること!」まずは1本の電話や1通のメールのやり取りを通じて、信頼関係を築いていくことから始めよう!
そして活動力に参加し、ご飯を食べに行き、飲み会へアプローツしてください!!

分科会後アンケート

1. 班の雰囲気はどうでしたか。

〈前半〉

- いろいろな人の子ども時代の話がたくさん聞けた。自分と共通する遊びなどもたくさんあった一方で、自分がしたことがない遊びなども一部あった。班全体としてはすごくなごやかで、いろいろな人の話が聴けて楽しかった。(1年、他2人)
- 終始なごやかな雰囲気でみんな話しやすそうだったが、昔の話で少し盛り上がりすぎた感じもあった。どこをどのように比較するか、が考えづらかった時もあり「何が必要なのか」のような議題には入れなかった。(1年)
- 「それ、わかる」など、自然と話ができる話題がよかった。(1年)
- 司会の振った話について、楽しいだけでなく、どんどん話を膨らませることが出来た。班の雰囲気としては話やすいものだった。しかし、なかなか自分から話してくれない人に対し、もっと話しやすくするようにすることができる効果的な方法、力を持っていなかったことは反省点である。
(1年)
- 気軽に何でも話することができる雰囲気だった。(1年、他6人)
- 社会問題も含め、現状を話し合えてよかった。(2年)
- 一人一人が自分の過去を振り返って意見を述べていた。子どものときについて話すときに、都会か田舎に分けたり、意見によって区別したりして考えた。(2年)
- 短い時間の中で、班員がまんべんなく発言できていて、聞きやすい雰囲気だった。(2年)
- 自分の過去を基にして、自分の小さい頃の話から入った。みんな様々な面白いエピソードを持っており、退屈しない話であった。まとめとして大きなものは出なかったものの、みんな今と昔のギャップを感じており、雰囲気としては満足いくものだった。(2年)
- メンバーがわりとお互いに気心がしれていたのも最初から話しやすい雰囲気があった。1年生も緊張せず話せていた。話しやすい雰囲気があった分、話の内容も理解しやすく、思っていたよりも深い話できた。(2年)
- 話しやすかった。ゲームについての話で盛り上がった。(2年)
- 自分の子どものころの話について、全員が話しやすかったのか、比較的に盛り上がったと思う。短時間ではあったが、現在の子どものことも比較して考えることができ、皆考えながらも気軽に発言できていたと思う。(2年、他4人)
- 話したことのない人もいたが、テーマ設定が話しやすいものだったので、みんな楽しそうに話していた。メイフレであんな風に楽しく話すということがあまりないので、今後たまには楽しく話せることもあっていいと思った。(2年)
- 子どもの実態について今と昔を比べながらイメージだけでも把握できた。また、そのうえでメイフレがどのように関わっていけばよいか建設的に話すことができた。(2年)
- 話しやすい雰囲気だったし、悩まずに話せる内容だったので会話が飛び交い良かった。しかし、途中で携帯を見たりするのはあまり良くないと感じた。(3年)
- 自分たちが子どもの頃の習い事や遊び方について、リラックスした雰囲気で話すことができていたと思う。(3年)
- 小学校の遊びはもちろん、恋の話もすることで打ち解けやすかった。年齢は近くても、学年によっ

て若干遊びの内容が違って面白かった。(4年)

- ・とても話しやすい雰囲気だった。司会がみんなに話を振ってくれたのでたくさん話すことができたし、いろいろな意見を聞くことができて満足した。後半の分科会に向けていいはずみとなった。(4年)
- ・みんなの声が聞けて良かった。個人個人が話しやすい雰囲気で「うんうん」と出来ていてよかった。(4年)
- ・すごく楽しく、気軽に話しができた。その中で一人一人が真剣に自分の思いを語っていてとてもためになった。(4年)
- ・自分たちの子どもの頃と今の子どもの遊びや環境ということで話しやすい内容だった。なごやかな雰囲気で話せた。(4年)
- ・最初はぎくしゃくしたが、皆が話しやすい雰囲気を出してくれた。テーマも話やすく、話がいろいろ膨らんでいった。(4年)
- ・みんな無理することなく、自分がしゃべりたいときに自分のタイミングで話せているように感じた。(4年)

〈後半〉

- ・皆、自分が思っていることを吐き出せたのではと思う。不安や悩みを共有することによって安心し“居場所”をメイフレにみいだせたのでは？またメイフレとは以外の話もできたのでこれはこれで、皆の意識が高まる契機になったのでは？(1年)
- ・議論を深めるというよりも、1、2年生のお悩み相談のような色が強かった。みんなが聴く姿勢を持っていたが、反論することはない、「うん、うん」と同意しあう形態だったので4年生は満足できたのかわからない。1、2年生は満足していたと思う。(1年)
- ・少し難しいテーマであり考える場面もあったが、とても聴く姿勢があり、すごく話しやすかった。(1年)
- ・メンバーも変わりまた違った雰囲気で楽しめた。同じ内容で深い話をしたのでとても真剣な雰囲気だった。なかなか話をまとめられず、みんなで頭をひねった。(1年)
- ・今まで自分が抱いていたことに対してたくさん話せてうれしかったし、勉強になった。いろいろな考えをもって活動に参加していることを知ることができ、これから活かしていきたい。(1年)
- ・しっかりと自分の意見を言う時間もありつつ、何でも言える雰囲気があったので、メリハリのあるいい時間を過ごせた。(1年)
- ・みんなの心の内が少しあらわになった。(2年)
- ・雰囲气的には悪くはなかったと思うが、話のつながりが難しい分どうしても司会と回答者のやりとりになってしまうことが多くあった。班全員で話が盛り上がるということはあまりなかった。もっと会話が飛び交うような話し合いにできたらよかった。発言は大体みんなできていた。(2年)
- ・個人への話の振りや、先輩の質問や答えにより、難しかったが考えやすく、また感心している様子だった。難しいために考え込む時間もあったが、皆言いたいことは言えていたのではないかと思う。議論になったり意見が対立したりすることはなかった。(2年)
- ・1年生から話を振り進めていった。なるべくみんなから話が聞けるように話を振ってみた。1年生が自ら今議題に挙がっていることについて、エピソードを交えて「こういうこともあった」と

話してくれたのがよかった。4年生は何度も話したことのあるテーマであったようだが、今回新しい視点から考えや疑問が挙がり、「今までそのように考えたことがなかったから新しい意見だ」と言っていた。(2年)

- 今まで何度も話し合われた内容だったが、班のみんなと真剣に話すことができた。(2年)
- 難しい内容だっただけに始めの方は対話型というよりは一人ずつ話していくという感じだったので沈黙があった。(2年)
- 非常に真剣な様子で話し合いが進んだ。自分が話をかき混ぜすぎているか不安になった。皆自分の体験や状況を考えつつ、意見を言い、聞く雰囲気が出ていた。(2年)
- 迷走してしまう場面もあったが、その分それぞれが考えを深められた雰囲気で、私は言いたかったことも言えた。(2年)
- 最初は1年生の悩みや困ったことなどを話し、それから先輩方のアドバイス、考えなどを頂くという形になってしまったが、その後はできるだけ全員が話をできるようにすることができ、ずっと黙っているような人は出てこなかった。他の2年生も各々が思っている班の運営についてどんどん突っ込んでくれたので、そこまで深い話にはならなかったが、結論として大きなものが1つ出たので、いい感じに終われたと思う。(2年)
- 各々の経験談をじっくりと聴ける雰囲気でとても良かった。(2年)
- 途中から話がテーマから逸れていた。違うことを話してもよかったのだろうか。(2年)
- 皆が話して、話を聞いてくれて、とてもよかったと思う。1年生にもっと話を聞けたらなおよかったなと思う。(2年)
- 伝え方一つで雰囲気は悪く感じた。まだまだ自分は子どもだと思った。(2年)
- とても話やすかった。(2年、他1人)
- 『子どもと接する上で』というテーマで様々な面について話した。先輩、後輩など関係なくいい話がたくさん聞けたので、今後の参考にしたい。(2年)
- みんなしっかり意見を言えていた。(2年)
- みんなの胸の内を真剣に話し、聞く姿勢がとても印象的だった。分科会だけではなく今後も話していきたいといいあっていて良かった。(3年)
- 1、2年生も緊張することなく話ができているようだった。ただ、司会としてうまく話を振ったりまとめたりができなかった。(3年)
- 1年生も2年生も自分の考えをしっかりと話してくれたので、話し合いがとても活発で良かった。子どもへの接し方でも、自分のしたことのない対応やエピソードがあって楽しかったし、ためになった。(4年)
- 班全体で議論ができた印象だった。じっくり話せた一方で、子どもに対する支援方法が自分の中で少し変化したと思う。お互い相手の事を尊重しながら話ができた。(4年)
- 最後の分科会だったけれど、出席できて良かった。何よりいろいろな人の意見を聞き、自分にはない新たな視点を見つけることができた。やはり議論は大事だと思い、来年からもこの経験を活かしていきたい。(4年)
- 班長を中心に聞きたいことが聞けていい勉強になったと思う。(4年)
- 『目的について』というテーマが難しかったためか、一人一人黙る場面が少し多かった。しかし、だからこそみんなの話がすごく印象に残った。(4年)
- 重く難しい話題も出て、話がよく理解できなかったこともあったが、自分と全く違う考えも聞け

ておもしろかった。(4年)

- 前半と同様、話やすい雰囲気だった。子どもとの接し方について様々な話がでてきておもしろかった。(4年)
- テーマからいろいろ逸れた話を含んでいた。今、話したいこと、メイフレに対して、言いたいことを言える。疑問もなげかけやすかった。(4年)
- よかったと思う。欲を言えば全員が本当に話したいことを素直に聞けていたかちょっと心配である。(4年)

2. 今日一番心に響いた一言は何ですか。また、それを聞いてどう感じましたか。

- 『班を運営する前の準備が大事』(1年)
班でその日に決めることはもちろん、その前にどのような班の話し合いにしていくかなどを班長・副班長・班員が共有しておくことで運営しやすくなるし、仕事を遠慮なく振ることもできる。
- 『子どもにある程度の課題を与えてつきはなして見ること』(1年)
自分の中には今までそういう考え方があまりなかったので、子ども同士での仲を深めるためにも考慮してみようと思った。
- 『裏方は広く浅く、班付は狭く深く子どもと関わる』(1年)
それぞれの立ち位置で関わり方は違うけど、子どもに友達でも先生でもない『学生』として関わるべきだと感じた。
- 『活動を行うことで目的が達成される活動を考えることが大切。目的のために学生が声かけで誘導していくことはこじつけに近い』(1年)
今後自分が企画していく上で考えさせられると感じた。
- 『メイフレは俺らの『居場所』になっているのでは』(1年)
- 『今メイフレにいるからできている』(1年)
いろいろと悩みはあったが、それは、今メイフレの時間があるからこそで、これからを大切にしていかなければいけないと感じた。
- 『来てよかったと子どもが思える活動』(1年)
子どもたちに必要なことはたくさんあるが、メイフレの活動において一番大切なことはこれなのかと思った。
- 『外から見たメイフレ』(2年)
- 『子どもの根本は今も変わらない』(2年)
子ども自身ではなく、子どもを囲む周りの状況が変化している。環境は子どもの成長に最も大きく影響を与えるものである。
- 『コミュニケーション』『異年齢の交流』『メイフレはメイフレに来てくれる子だけ』『子ども一人一人が何を求めているのか分からない』『その子に応じた対応』(2年)
- 『班の班長副班長が決まった時に、すべての仕事をあらかじめ分担しておく』(2年)
分科会の中で一番多かった意見が、「どこまでが班長の仕事か分からなくて、結局自分が全部してしまう」ということであった。そうなるのが分かっているのであれば、今度新たに班長副班長をする人には是非最初にしてほしいと感じた。
- 後半でみんなが子どもと接するときのこだわりを聞いたのが嬉しかった。(2年)
- 『1、2年生の時は誰でも手探りで班の運営をする』(2年)

他の班はとてもよく進行しているように見え、それと比べてしまう癖があったが、誰でも手探りで一生懸命やっているのだと改めて感じる事ができた。

- ・『みんなたまってる』（2年）

もっとぶっちゃけるような機会を増やなければと感じた。

- ・『周りの環境を整えてあげれば、子どもたちは自発的に動ける』（2年）

メイフレで企画する中身はこれだと思った。

- ・『話し合いの仕方についても班で最初に話すべき』『話し合いの仕方に問題がある』（2年）なるほどと思った。

- ・『みんな色々思ってることがあるんだ』（2年）

悩んだり考えたりすることもあるけれど、みんなも同じように不安なんだと思って安心した。

- ・『いつも子どもの表情を見ている』（2年）

子どもが何を考えているか、今楽しんでいるか表情を見ることは大切だと思った。裏方のときでも、もし、嫌な顔をしていたら、班付にこっそり教えるなど気をつけたい。

- ・『プランナーは参加者のことをもっと考えなくていいのか』（2年）

プランナーを半期したが、その視点を考えたことは一度もなかったため、少し驚いた。

でも、それでも自分はまずプランナーのことを考えるだろうなと思った。

- ・『自分の本心を伝えながら注意する』（2年）

自分は子どもと仲良くなりたいと思うが、一時期叱ることにより子どもと距離ができたように感じたトラウマがある。子どものことを思っていることならば、それも伝えればいいと思った。

- ・『学生それぞれ異なる意見の中で、共通の部分となっているところが目的となる』（2年）

何か決める際、学生間でどちらかの意見に合わせたり、多数決のようになっていたりすることがあり、活動を考えていく中で、「これはあの人の考えだから、よく分からないけれど」と言うのを聞いたことがある。このように共通の部分をつなぎ合わせることで、学生の中で本当に共通意識が持てると実感した。

- ・『目的が先なのか活動が先なのかにこだわる必要はない。とにかく「子どもありき」で目的を立てるべき。学生が「これをしたい」という学生主体になったら終わり』（2年）

方法論ばかりに目がいって、「子どもに何を感じてほしいか」という根本を忘れていたと思った。

- ・『もっと話したい。後輩に伝えたい、話したり、ご飯食べに行ったりしたい』（3年）

悩むことや辛いこともあるが、みんなこれからも頑張ろうとしているし、後輩へメイフレの魅力を感じてもらうために努力しようとしていると強く感じる事ができて、すごくうれしかった。

- ・『結果だけを見て判断しない』（4年）

子どもがケンカした状況で一方だけを叱らない、両者の話をきちんと聞いてあげることが解決の糸口になることを学んだ。

- ・『裏方は広く浅く』（4年）

子どもとある程度接して楽しむものの、班に返すことを忘れないようにしようと思った。

- ・『子どもありき』（4年）

やはりメイフレは子どもの事を一番に考えなくてはいけないと思った。

- ・『放置するのも時には大事』（4年）

今後の過程で大事にしていきたいと思った。

- ・『プランナーの活動に参加した子どもたちのための目的をたてるべきか』（4年）

プランナーを経験したことないが、もしそれについて考え、実際にやってみるならば、さらにメイフレの幅が広がると思う。

- ・『先輩のすてきさ、それがあって、メイフレの魅力がある』『友達と心が通じ合い、自分の居場所ができる』『自分の自己成長のためにメイフレは最高の環境であること』（４年）

メイフレには他の場所にはない魅力がたくさんあるから、苦しくてきつくても続けられるのだと思った。みんな思ったり感じたりすることは似ているので、みんなが少しずつでも、話し合っ、理解しあったり、支えあってくれたら、メイフレってもっとよくなると思う。一つでも大きな魅力があれば、子どもたちのために尽くしていけると思う。

- ・『子どもの根っこは変わってない』（４年）
- ・『単発でもプランナーでも子どもとの接し方は変わらない』（４年）
子ども一人一人と向き合っていくことが大切だと、とにかく改めて感じた。
- ・『活動のときは目的などを全くと言っていいほど意識していない』（４年）
自分が目的を意識しているからこそ衝撃を受けた。目の前の子どもを自分は本当に大切にできているか。

3. 今後メイフレで話したいことはありますか。

- ・メイフレについて、目的について。（１年、他４人）
- ・今回のテーマの中の他のもの（１年、他２人）
- ・子ども目線について。（１年）
- ・子どもから見て学生はどういう存在であるべきなのか。（１年、他１人）
- ・メイフレで目指すものとは具体的に何か。（１年）
- ・みんなが将来何になろうと考えているのか。メイフレの活動は、教職以外の仕事でどのように活かせるのか話したい。（１年、他５人）
- ・班付きと裏方のスタンス（立場）の違いを話してみたい。（１年）
- ・子どもとのエピソードなどをもとに、子どものことを話したい。（２年）
- ・活動中の意識について。（目的等を意識しながら活動しているのか）（２年）
- ・メイフレやいろいろな活動に来る子どもたちはほんの一部の子どもたち。活動へ参加することのない子どもたちに私たちができることはないのか。（２年、他２人）
- ・班活動での素朴な悩みについて。（２年）
- ・メイフレはみんなにとって負担なのか。忙しすぎるのか。忙しすぎるのは前からなのか。みんなできつさを共有したら楽になるのか。（２年）
- ・過去の班での体験談や秘話（２年）
- ・メイフレとして関わる子どもと教師として関わる子ども。（２年、他１人）
- ・子どもとの楽しいエピソードなど（２年）
- ・様々な環境に生きる子どもについて。自分たちにできること。（４年）
- ・今回話したこと（子供との接し方）を他の人たちとも話してみたい。（４年）

4. 意見、要望、感想等がありましたら書いてください。

- ・この分科会が僕にとっていい刺激になった。（１年）
- ・話しやすかったことが一番感じたことだった。でも話しやすいだけでは、なかなか深い議論にま

で到達しなかったので、もう少しみんなが考え込むような議題もいいのではないかと思った。

(1年)

- ・プランナーとして活動してきた自分が、他の班の先輩や今まで接したことのない先輩と話ができて良かった。普段のメイフレにも振り返り以外でこのようなことがたまにあればと感じた。

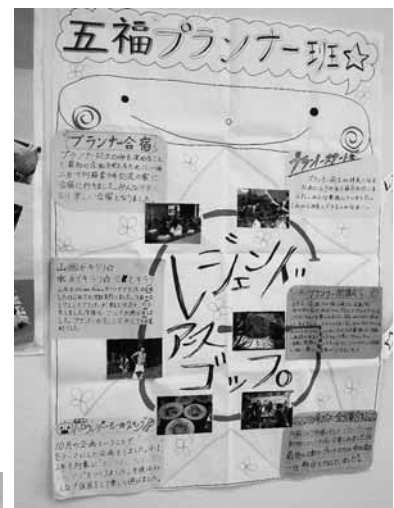
(1年)

- ・他の班で話しあったことを詳しく知りたい。(1年)
- ・自分の考え方に変化を持つことができ、すごく有意義な会だった。(1年、他1人)
- ・自分の話したかったこと、聞いたかったことも話し合いの内容に取り入れることができたのでよかった。しかし、班のみんなが満足のいく話し合いをつくるのは難しかった。もっと話を深めたり、今話していることの論点は何かということをしかり把握できるようにならないといけないと思った。(2年)
- ・前半、後半を通してみんなで議論を交わし、楽しい時間になった。なかなか話す機会のない話題や考え方、やり方を知ることができる分科会は非常に有意義だった。(2年)
- ・前半、後半ともに子どもの実態について話したが、共通する部分も多々あった。まとめ、答えの出せるものではないが、すっきりする感じが味わえた。子どもに寄り添い、子どもたちにとってプラスになってくれればと思った。(2年)
- ・とても難しいテーマだったけれど、色々な意見を聞けたし、話すことでとても有意義な時間を過ごせた。(2年)
- ・前半、後半ともにとても楽しい雰囲気ですることができた。後半は自分の話したいことについて、しかり話し合うことができたのでよかった。(2年、他3人)
- ・小テーマがいくつかあって、班員の話したいことなども、まとめてあって、とても話を理解しやすかった。(2年)
- ・いろいろな人とじっくり話せる機会でありとても良かった。班分けや話し合いと議題に関するプリントも見やすく、余白も多くあり書き込みもしやすくて良かった。(2年)
- ・皆がそれぞれ意識を持って参加していたのか、順調に盛り上がって終わったので良かった。また、自分の中でも、疑問が少なからず解消されたのでうれしかった。(2年)
- ・前半は今までの分科会とはだいぶ雰囲気が違ったので先輩方は「こんなに楽しい話でいいのか」と言いながらも、みんな楽しそうに話をしていたのでよかったと思う。後半は、4年生は分科会でもう3、4回話したことがあるテーマだったらしく、自分の中で答えを見出しているようなところもあった。先輩も気づかなかった、思いもしなかった考え方が1つ出たので、そのことについてはみんなでじっくり話せたと思う。(2年)
- ・普段活動の話し合いに追われてゆっくりと話ができないためか、こんなに話したいことがあるのかと驚いたし、分科会で少しでも発散できたようで安心した。みんなが分科会のときだけではなく話したい、でも話す場は設けないと話せず終わってしまうから場を作らなくてはならないと考えていて嬉しかった。そのような考えを持つ人が増えるように後輩たちと関わっていききたい。

(3年)

- ・1日に3時間弱話すとやはり疲れた。分科会だけで終わらず、個人的にもっと1、2年生が悩んでいることや先輩の経験談などを聴いていきたいと思った。(3年)
- ・「小学校のころを思い返す」という新しいテーマがあって、学生もいつもの話し合いより気さくな雰囲気で、日ごろ思っていることや自分のことを話せていて良かった。(4年)

- ・とても満足した。みんなに負けないように自分も成長し続けようと思う。(4年)
- ・内容的に話やすく良かったと思う。先輩の意見、後輩の意見が互いに今後「つながる」場になったと思う。(4年)
- ・シンポジウムには参加できなかったけれど、みんなが一生懸命に考えてくれたことはすごく伝わってきた。(4年)
- ・色々な考えが聞けて刺激になった。(4年)
- ・1、2年生の率直な意見や自分のこだわり、大切にしていることを聞け、自分自身の教育観がまた揺さぶられた。メイフレでみんなの子どもの接し方、考え方を知れたことで、自分自身の考えも鮮明になったし、そこから課題も浮かびあがってきた。今回のテーマであった「つながり」は普段の一人一人の意識によってどれくらい形になるかが変わってくると思う。自分はなかなかできなかったけど、自分から他人を思いやり、関わる心を大切にしたいと思った。(4年)



Ⅲ. フレンドシップ事業のまとめと課題



10周年を迎えたメイクフレンズ — 時を越えた「つながり」に感謝 —

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 中 山 玄 三

熊本県教育庁社会教育課長の小野賢志様から、昨年度に引き続き、本年度のシンポジウムでも特別講演を賜りました。「なぜ私がここにいるかは、吉田センター長に聞いてください。」というお話がありました。思い起こせば、フレンドシップ事業開始当初の1997（平成9）年度から今年度に至るまで、吉田先生のお取り計らいにより、同社会教育課長に特別講演をご依頼してきており、14年目を迎えました。各人のお名前は差し控させていただきますが、これまでのべ7人の課長諸氏より貴重なお話をいただけてきました。今後とも何とぞよろしくお願い申し上げる次第です。

熊本市内の社会教育施設である公民館が、今も昔も変わらず、メイフレの主要な活動の場となっています。特に、託麻公民館社会教育主事の中川正先生から、はじめてのおかいものの活動が21回目を迎え、来年度も保護者の方からリクエストが来ていますというお話がありました。思い起こせば、2000（平成12）年7月に同公民館で実施した「はじめてのおかいもの」が、メイクフレンズとしての最初の記念すべき活動でした。1997（平成9）年度からスタートしたフレンドシップ事業のリピーターで、当時研究生であった満留桂子さん、当時大学院 M1 であった中村（旧姓）泰子さん、当時3年生であった藤田勝一さん（第0代船長）が中心となってこの活動を企画し、後に初代メイフレ船長となった北崎圭太さんが、当時はまだ1年生としてこの活動に参加していました。この「はじめてのおかいもの」の活動に参加した子どもとその保護者からの口コミ情報が、10年以上に渡り、世代を越えて伝わってきたということ、そして、今日でも、同公民館の事業として、また、メイフレの活動として、継続しているということに、深い感慨を覚えざるを得ませんでした。今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

また、熊本県生涯学習推進センター社会教育主事の太田黒保宏先生からは、同センターが9年目を迎え、メイフレの学生さんには生涯学習フェスティバルにずっと関わっていただいていますというお話がありました。思い起こせば、2003（平成15）年8月に同センターで開催された生涯学習フェスティバルのシンポジウムに、当時3年生であった第2代船長の堀口（旧姓）沙織さんが代表として参加させていただき、メイフレの活動発表をしたことが最初でした。また、これがきっかけとなって、同2003（平成15）年より、熊本市教育委員会生涯学習課とのご縁ができ、メイフレの学生が熊本市野外活動等指導員に初めて登録され、実際に集会等でレクリエーションゲームを担当する活動が開始しました。これらの活動もまた、8年間の時を経て今日まで、同連携協力機関の事業として、また、メイフレの活動として、継続しているということに、改めて、感慨を隠せずにはいられませんでした。今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

メイフレの活動を長年に渡りご支援いただいています連携協力機関関係者の各位に対して、10年という時を越えた「つながり」に深く感謝申し上げます。また、メイフレでかつて活動した卒業生の皆さん、並びに現在活動中の在学生の皆さんに対しても、10年という時を越えた「つながり」に深く感謝いたします。2011（平成23）年2月にメイフレ10周年記念パーティーが熊本市内で開かれ、

総勢約80人が集まりました。第2代船長の堀口（旧姓）沙織さんと第3代船長の橋本（旧姓）美甲子さんが幹事でした。このお二人がそれぞれ船長であった世代の人々が、現在のメイフレの活動体系を確立したと言っても過言ではありません。実は、この世代の方々には、私が大変厳しく叱咤激励し過ぎて（!?!）、泣かせたことも多々ありました。10周年記念パーティーの案内状が私の手元に届いたときには、10年後のお礼参りかと少し躊躇しました。しかし、実際にパーティーに参加してみると、時を越えた「つながり」というものを実感することができ、感慨もひとしおでした。本当に楽しいひとときをありがとうございました。

「メイクフレンズ」という言葉には、発足当初の学生によるネイミングではありますが、「つながり」という思いが込められています。1999（平成11）年11月に信州大学で開催されたフレンドシップ全国学生シンポジウム（初回）に、当時4年生であった百原（旧姓）雅さんと私が一緒に参加したことがきっかけとなって、同年度末3月に熊本大学で学生自主企画によるシンポジウムが初めて開かれました。当時、百原さんが書き記した報告書の原稿では、次のように述べられています。

『一本の木でできることというのは限られています。けれども、一本の木が林となり森となったら、今までの何倍もの世界が広がっていくのです。小さな力もつながりあうことで大きな力となっていくのです。この大切な仲間が存在は省くことはできません。（略） どんなりんごにも種が必ず存在します。この種がまた大地に届いた時、その種は再び新たな芽を出します。この芽が次のフレンドシップを担う後輩となっていくのです。こうやって木は自分自身も成長しながら、仲間とともに手と手を取りあって広く大きく育っていくのです。（略） これからも、もっともっと沢山の木たちが根をはり枝をはるすてきな樹木になることを願いつつ、フレンドシップと出逢えたことに喜びを感じています。』

こうして、2000（平成12）年度に「メイクフレンズ」が誕生して以来、今年度初めて、これまでの卒業生と在学生在が一同に会する機会を持つことが出来ました。これからはずっと「つながり」を大切にしていって下さい。

To be continued !!

平成22年度フレンドシップ事業の感想 ーフレンドシップ活動の歴史と学生の成長ー

教育学部附属教育実践総合センター 高 原 朗 子

今年のシンポジウムでは、「子どもたちとの関わりを通して育つ学生たち」というテーマで行われ学生の報告および熊本県市の関係機関の先生による講評、熊本県社会教育課小野課長による特別講演などが行われました。実は、はじめにそのテーマを見た時、一瞬不思議な感じがしたものです。普通なら「学生たちとの関わりを通して育つ子どもたち」となるだろうに、逆だったからです。その理由を知りたくて28日のシンポジウムに臨み、上記の答えを捜していました。学生達は異年齢の子ども同士の交流、子どもの実態に即した企画、ただ楽しいだけではない工夫などについて報告をしてくれました。どの報告も「子どもたちは本当に楽しかったんだろうな」と

思わせる内容でした。

実はこれらの場面を生き生きと想起させる話が出来ることこそ、学生達が成長した証しではないかと思うのです。子どもたちを「喜ばせたい、感動させたい」、そのためにはどうしたらいいか。まずは「対象である子どもに対する知識」、「仕掛け・環境をどうしていくか」、「その場面で起こりうる様々な可能性の想定」、「予期せぬ事態で臨機応変に対応すること」等が必要になるでしょう。おそらく、今年のフレンドシップ事業ではその様々な段階をある程度クリア出来たからこそ、良い発表ばかりとなったのだと考えます。その段階をクリアした学生が成長していないはずはないわけです。そういった意味で今回のシンポジウムのテーマはまさに学生の成長の報告会であったのだなぁと納得した次第です。

聞くとところによるとフレンドシップ事業10周年の同窓会があり、多くのOB・OG・現役生の参加があり、盛り上がったとか。目の間にいる学生は常に10代から20代ですが、やはりこの事業の歴史がちょっとずつ彼らを成長させているのでしょう。来年度もフレンドシップ活動によって学生も子どもも大きく成長することを祈っています。

フレンドシップ事業に思う

教育学部附属教育実践総合センター特任教授 田 中 耕 治

今年度、初めてフレンドシップ活動を見聞きしたのですが、正直言ってサプライズでした。さらに言えば、さわやかな感動さえ覚えました。今、多くの若者の間に、無気力、無関心、無感動といった風潮が広がっていると言われていています。そういった状況の中で、自主的、自発的に、和気あいあいと仲間と創意工夫しながら、子どもたちとのかかわりを企画実践している若者たちがいるということに、新鮮さとたくましさを感じました。

教育現場に長い間、身を置いた人間として、今思っていることがあります。それは、「若い先生方には、今後さらに実践的指導力と対人関係力が必要とされている」ということです。教育現場では、その時、その場にに応じた「応用力」が必要とされるのです。その「応用力」は、常に、「こんな場合どうしようか」と考える日々の生活の中からは育ちません。そういった意味からも、このフレンドシップの活動はとても役に立つものだと思います。しかも活動の内容が「子ども理解のあり方」、「子どもの主体的活動のあり方」、「子ども同士をつなぐ活動のあり方」など、今、どの学校でも実践研究されているものばかりです。また、指導者同士のつながりを広げる場を大切にしているところにも共感を覚えました。学校はもはや、個人の力だけでなく、組織体として機能することが求められているからです。

さらに、学生の皆さんが、「しっかりとした自分の意見を言えるようになった。」とか「相手のことも考えられるようになってきた」といった子どもの成長を自分自身の喜びとしているところも大変うれしく思いました。

この喜びが教職の魅力であり、だいた味であると思います。

私は、このフレンドシップの活動は本物だと思います。

来年度以降もこのフレンドシップの活動が益々充実・発展することを祈っています。